

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（基盤研究（S））中間評価

課題番号	21H04981	研究期間	令和3（2021）年度 ～令和7（2025）年度
研究課題名	個別的育児支援手法の創出を導く 養育者－乳児の動態とその多様性 創発原理の解明	研究代表者 （所属・職）  （令和5年3月現在）	明和 政子  （京都大学・教育学研究科・教授）

【令和5（2023）年度 中間評価結果】

評価	評価基準
A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○ A-	一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要であるが、概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれる
B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>（研究の概要）</p> <p>本研究は、生後半年～1年半のヒト養育者－乳児の相互作用とそこに潜在する多様性の機構・機序、その生物学的基盤について、内受容感覚と外受容感覚の統合プロセスに着目して、身体生理データと行動制御の動態データを基に解明しようとするものである。最終的には、個々の相互作用時の動態を予測するモデルを構築し、「個別型」育児支援実現に向けた指針を創出することを目標としている。</p>	
<p>（意見等）</p> <p>本研究においては、発達科学を専門とする研究代表者と、生物学専門、情報科学専門の研究分担者の計3名が協働し、①養育個体－子間の相互作用で発生する動態データ収集とその解明、②①の構成要素の因果検証、多様性創発に関する仮説提示、③相互作用の多様性創発の原理解明、育児支援開発に向けた指針の提案、という3つの課題に取り組む。それらは積み上げ式となっており、新型コロナウイルス感染症の影響により、課題①の遂行が大幅に遅れたため、研究全体のスピードが大幅に落ちていることは否めず、研究分担者との協働も十分に行われていない。</p> <p>一方で、当初想定していた生後1年未満の乳児に対するデータ収集は新型コロナウイルス感染症の影響により断念したものの、親子の腸内細菌叢のデータベースを構築しており、そこから「腸内細菌叢－自律神経系－精神・行動」の相関が個体内のみならず、親子の個体間においても見られることを示すなど、画期的な成果を国際的に発信している。さらに、マウス母仔ペアを対象とした自律神経系の時系列データ収集にも着手しており、着実に課題②へ進んでいるようである。</p> <p>ここまでの研究に関して、学術論文としてのアウトプットがまだ少なく、最終的な目標である「個別的育児支援手法」がどのように構築されているかの道筋は未だ明確ではないものの、制約の多い中で精力的な研究が展開されている。</p>	